

(Ⅳ-97) 近代における民間組織の社会基盤整備事業への関与に関する一考察

足利工業大学工学部土木工学科 正 会 員 福島 二郎
 足利工業大学工学部土木工学科 学生会員 高久 祥孝
 足利工業大学工学部土木工学科 学生会員 和田 直樹

1. はじめに

近代の足利市には、「足利友愛義団」という民間組織による団体が存在し、種々の活動を行う中で、社会基盤整備事業にも多大の関与があった。そこで本研究では、義団の関与によって実現した社会基盤整備事業を取り上げ、その実現に至る展開過程について検証を行うとともに、義団が事業の実現に関わることができたその要因について考察を行う。

2. 足利友愛義団の事績

(1) 義団の設立と運営

足利友愛義団は、明治 25 年に当時の足利町の青年機業家ら 22 名により結成され、昭和 7 年まで存在した。この間、明治 38 年には社団法人となり、団員数は最盛期には 250 名に達した。その活動は、災害救助等の義援活動、廃娼運動等の風紀矯正活動、機業の振興を目的とした五二会足利支部発足の主導、さらに足利英語研究会（後に私立足利英語学校に改組）の設立等、社会教育活動にもおよんだ。

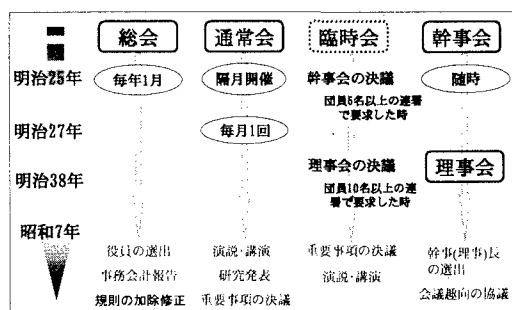


図1 会議の種類

また、このような活動を支えた組織の運営は幹事会（社団法人に移行後は理事会）が中心となり、義団の決議・意志の決定は図-1に示す各種会議により行われた。特に、通常会は、重要事項の審議のみならず、団員の輪番による研究発表会が行われるとともに、当代の名士を招聘しての演説・講演会が開催された。通常会におけるこのような取り組みは、団員の知徳の向上に大きく関わったものと考えられる。

(2) 社会基盤整備事業への関与

表-1に、義団が関与した社会基盤整備事業とその展開を示す。義団が関わった事業は、東武鉄道の足利延長（明治 40 年 8 月開通、義団では明治 36 年 11 月 1 日通常会にて議論）、電話の架設（明治 40 年 8 月開通）、電燈（明治 40 年 12 月 26 日設置）、市制施行（大正 10 年 1 月 1 日施行）、中橋架橋（昭和 11 年開通）、渡良瀬橋梁の新設と架替、および上水道の敷設の 7 件である。実現に向けた義団関与の具体的検証は、渡良瀬橋梁の新設と架替、および上水道の敷設事業を事例として次章に行う。

表-1 足利友愛義団が関与した社会基盤整備事業

年代	月日	事業の展開
明治28年	9月	渡良瀬川橋梁新設願が県知事佐藤暢宛に提出される。
明治32年	12月4日	渡良瀬川橋梁新設願が県議会において可決される。
明治35年	7月	渡良瀬橋梁通（木竹に架け渡したものを）を協議する。
明治36年	11月1日	渡良瀬橋梁通（木竹に架け渡したものを）を協議する。
明治40年	8月	東武鉄道足利まで延長される。
明治40年	12月26日	電話開通。
大正6年	3月9日	上水道敷設の要望が出される。
大正10年	1月1日	市制施行。
昭和3年	4月13日	市議会において上水道敷設案が可決される。
昭和3年	4月20日	市議会において上水道敷設案が可決される。
昭和4年	3月26日	上水道工事に着手。
昭和4年	9月	渡良瀬橋梁新設と架替の要望が市議会に提出され、これが可決される。
昭和6年	4月	給水開始。
昭和9年	9月	渡良瀬橋梁は中橋と関連して大改修を行い、永久橋となる。
昭和11年		中橋開通。

表-2 「渡良瀬橋梁・架替」の決議時の議員構成

（昭和4年度第6回市議会） 9月24日開会 （出席議員29名）	
新村 健治	緒貫 操
岡崎 弥市	木村 浅七
菊地 菊次郎	勝倉 秋太郎
原田 敏七	山藤 勝四郎
吉田 孫三郎	初谷 定吉
杉田 五蔵	松崎 元吉
石川 道之助	岩根 鑑光
田部井 文四郎	
（欠席議員1名）	
初谷 嘉三郎	峰岸 善七
相場 周一郎	川島 藤左衛門
大竹 藤三郎	渡辺 利助
堀越 喜三	藤田 宗三郎
川田 伸造	大山 季治郎
渡辺 萬太郎	廣田 文
堀越 龍三郎	小林 龍三
（※議長、太字は友愛義団員）	

3. 橋梁架設と上水道敷設における義団関与の検証と分析

(1) 渡良瀬橋の新設・架替

① 事業の展開過程

明治 28 年 9 月に渡良瀬川橋梁の新設願が足利梁田郡の有志により栃木県知事佐藤暢宛てに提出され、同年 12 月 4 日の県議会において可決された。これを受けて翌年以降、その着工に向けた具体的な

キーワード：近代、足利市、民間組織、事績評価

連絡先：足利工業大学工学部土木工学科、栃木県足利市大前町 26 8-1、TEL. 0284(62)0605

審議が行われ、明治 35 年 7 月に渡良瀬橋が竣工された。その後、渡良瀬橋拡張および架替についての意見書が昭和 4 年 9 月 24 日の市議会に提出され、同議会において可決され架替が行われた。その後渡良瀬橋は、昭和 9 年に再度改修が行われ、現在に至っている。

② 義団関与の検証および分析

新設架橋案が可決されたのは、明治 28 年 12 月 4 日の県議会である。この審議の席には、県議会議員として足利地域からは 3 名が出席しており、その内の 1 人は団員の木村半兵衛であり、その決議に加わっている。その後、具体的に進捗しない事業の状況を踏まえ、義団は明治 32 年 12 月 1 日の通常会において会議が行われ（荻野萬太郎幹事長以下団員 23 名）、その進展を期している。また、腐朽が顕著となった昭和 4 年の架替に際しては、市議会において団員の岩根歳光が拡張および架替の必要性を訴えるとともに、審議の席上その決議に向けた発言を行っている。結局、この架替事業は同市議会において可決されたが、この時の議員構成は、29 名中団員は 12 名を占めていた。表-2 に、渡良瀬橋拡張・架替事業の決議が行われた議会の議員構成を示す。

(2) 上水道の敷設

① 事業の展開過程

足利市における上水道の敷設事業は、大正 6 年に一部町民が飲料水の改善を求めたことに始まる。翌年には町務調査会の検討事項に上水道敷設に関する項目が追加され、その検討が開始された。その後、大正 11 年に上水道調査委員会が設置され、昭和 3 年 4 月には市議会において水道敷設案が可決された。これを受けて県および国の主務省への申請が行われ、同年 10 月に内務大臣の認可が下りた。そして翌 4 年 5 月に着工し、昭和 6 年 4 月に給水が開始された。

② 義団関与の検証および分析

飲料水の不良が指摘されはじめた大正 6 年以降、義団ではその改善策として上水道敷設の検討を行っている。上水道敷設についての検討機関である町務調査会、およびその検討を引き継いだ上下水道調査委員会（大正 11 年 3 月）には多くの団員が委員として加わり、その実現に向けた検討を行っている。そして、市議会において敷設案が決議された昭和 3 年 4 月 13 日の議場には、議員として 7 名の団員が出席するとともに、団員の 1 人である殿岡利助は反対意見を論破する等、荻野萬太郎議長（団員）とともにその可決に大きく関わっている。表-3 に、上水道敷設案の決議が行われた議会の議員構成を示す。

表-3 「水道敷設の件」決議時の議員構成

〔昭和3年度、第2回市議会〕4月13日開会			
〔出席議員18名〕			
小泉 改平	福田 健治	石川 道之助	栗崎 隆輔
川島 久三郎	原田 政七	廣田 文	西村 佐吉
※荻野 萬太郎	牛窪 忠七	酒巻 仁兵衛	松崎 元吉
影山 勝吉	林鷲 五郎	石岡 郡造	殿岡 利助
斎藤 與左衛門	富永 金吉		
〔欠席議員9名〕			
〔※議長、太字は友愛義団団員〕			

(3) 議会に占める団員数の推移

表-4 に、明治 31 年以降の町議会および市議会に占める足利友愛義団の団員数の推移を示す。義団の発足は明治 25 年であり、その発足後間もない明治 31 年の町議会では、定員 24 に対し団員は 8 名であった。その後、明治 38 年の社団法人移行後の明治 43 年には 12 名となり、以降、市制施行を挟み昭和 8 年までの間 10～12 名を擁し、この割合は、常に定員の 33%を超えている。このことは、この間議長を務めたのが団員である荻野萬太郎であることも含め、議案の誘導等、その決議に大きく関わったものと考えられる。

表-4 町・市議会議員に占める友愛義団員の割合

年代	議員 (人)	団員 (人)	割合 (%)
明治31年～明治34年	24	8	33
明治34年～明治37年	30	9	30
明治43年～大正2年	30	12	40
大正6年～大正9年	30	10	33
大正10年～大正14年	30	12	40
大正14年～昭和4年	30	10	33
昭和4年～昭和8年	30	12	40

4. まとめ

本研究により得られた成果は、以下のとおりである。

(1) 足利友愛義団の社会基盤整備事業への関与の実態が解明された。すなわち、提唱および提言だけに止まらず、事業の決議機関である議会への団員の進出が、事業の実現に結びついた。

(2) また、このような団員の議会への進出を促した背景には、会務運営の中心を成した通常会の活動があった。すなわち、団員の成長、団員相互の知徳向上を促したのは、先達による講演会開催とともに行われた団員の輪番による研究発表会であり、義団の活動基軸の確かさがその成長を支えた。